

四時氣義卷第八 四時氣第十九

○小腹痛み腫れ、小便を得ずるは、邪、三焦の紋に在り。

・甲乙經九に三焦膀胱、病を受り山田、少腹の腫れを又發し。

小便を得ずるは、
にこす。(乙は訂正の意)

・甲乙經は「痛腫」
太素は「病腫」に

作お

・素問、邪氣藏府病形篇に云ふ、三焦病者は、腹に氣満ち、小腹尤も堅く、小便を得ず。腎急し、溢れ山田は、則ち水留り、即ち

苦み

脹を爲す。候は太陽の外、大絡に在り。大絡は太陽、少腹の間に在り。亦脈に見はれ、垂陽を取れ。膀胱病者は、小腹偏腫し、痛む。手を以て之を按、せお、即ち小便を致すれど得

「山はより」

甲乙經に云はく、「少腹中滿一、缺閉」と滿を得たりは、足三里
之を主ふ。小腹中滿一（一本は中病に作る）、小便利せたりは、
湧泉之を主ふ。

馬蒔曰く、「此山、邪の三焦にはる者、利すの法と云ふなり」と。

張志聰曰く、「此れ、邪が膀胱に在りて病を爲すなり。三焦の

下俞は委陽に出で、太陽の正と並ひ、膀胱に絡み入りて、下焦を

約す。實すれば閉、虚すれば遺溺す。山腹、腫れ痛む。

小便を得ず。邪は三焦に在りて、約すれば也」

○之を太陽の大經に取れ。この絡脈と厥陰の山絡とを視て、
結ばれぬ血ある者は、臍上及び胃脘を刺し、三里を取れ。一、
从不紊、

不紊は、穴の上にはる字有り。甲乙經も同。其の穴下に「結」字有り。

「絡結」とす。

・楊上管曰く「足太陽の大絡、及び足厥陰の孫絡を刺す可し。
血脈聚の血あれば、刺之と去す可し。又、臍上及び胃管を刺り
て刺す可し。并に三焦を刺す也」

・張志聰曰く「當に足太陽の大絡を取るとは、即ち大絡の妻陽を
取すべし。大絡は經脈にあたり、小絡は孫絡なり。足太陽
厥陰の絡は、跗跖の間に交絡し、その結ぶれど血あるを視れば、
之と去す。蓋し、肝は疎泄を主り、結の厥陰の絡に在れば、小便
を得ればなり。」

・高士奇曰く「若し小腹腫れて胃脘に及べば、則ち胃經の三里穴を
刺り、之を刺せ」

・桂山先生曰く「聖濟總錄に云く、黃帝三部鍼灸經に云く、
少腹腫痛、小便を導き、は邪三焦に在り、病名つけて三焦
の通也。管衛調はす、風邪のり、客せば、則ち決瀆の管も約
し、通せり、大小便を得ざる所以なり。刺法は足少陰と太陽の

經を取、湯劑を以て輔くるときは、三馬の疏導す、清濁を判つ
なり、とは方は杖殺丸等六首を載せ、方中に大黃、牽牛、柳子等の
類を多用す。

本節の三馬を存するに、勝狀を指す。上文は六府の病に列るものと、
勝狀には及ぼす。是以三馬は勝狀たると明なること知山。千金方に云ふ、

「三馬は名がけの中清の府なり、別號を玉海水道也、勝狀に屬
ふことは是なり。善解するに、洋液は鹽、本輸篇注に既出せり。

蓋し約とは即ち脾約の約にて、尙世寧校本・千金は約字
と以て下句に屬せしむ。また、珍有るに似たり。

張介賓は「太陽の穴は飛揚穴なり」と云ふ。(志聰、太陽)
馬氏注も亦同。甲之經を考ふるに、太陽は三馬の下輔俞なり。

是太陽の穴、太陽の經に在り、此れは太陽の別經なり。善解
するに、甲之經は本經(靈)本輸篇に本つ。則ち志聰は是と

爲すと

？

○其の色と観、其の目と察し、

原本は目と以に誤り。各本も同じ。今は太素に依り、正す。

○其の散復を知る者は、其の目色と視、以て病の存亡を知る也。

・楊上善曰く「散るとは、則ち病の止み、復とは則ち病の存する也」

・張介賓曰く「神完けしは則ち氣は復し、神失われしは則ち氣を散す。故に其の目色と察すれば、即ち病の存亡を知る可き也」

・高誘曰く「此のけし病を候ふ、と言ふ、望聞問切の法也。以て

爲す身」論語に「其の以て所を視よ」とある。

・張志聰曰く「其の以てを察すとは、其の知る所以の病を察する也」

・程山友生曰く「張氏は九鍼十土原、小鍼解に據りて、目字を補ふ、

今は上に従ふ」

・善将するに志聰曰く「散を邪散して病已ま也。復は病外

に存れども復しめに及ぶ、病内に在し、とも復し外に及ぶ也」此の

に察する

病の所を以て察するの法は、
(く) 3の様に在る所の病

解も亦を誤り。

○其の形と一に一、其の動靜を聽く者は氣口を持ち、人迎以て其の脈を視よ

・不素は一と壹に作お

・靈・少鐵解篇に云ふ、「其の色を視、其の目を察す、其の散緩と知お其の形と一に一、其の動靜を聽け。上は相かたき、五色を知り、目と知るといふ有りと言ふ。又可山大緩を滑瀉を調へ、以て病

ふ所を言ふ也」

・楊上善曰く「本に散せざるに務めれば、則ち其の形一なり。神を後と脈に在らば、則ち其の動靜を聽く也。氣口は平の太陰の寸口脈なり。人迎は則ち足の陽明の脈（あるところなり）馬其辭曰く「《目は五藏の精華なり。以て是れ以て大珍察法とす。主と為すなり。又診其の形の肥瘦を」とすなり。一とすと曰ふは、

理想的な浮脈と一ツのものを決める。

(中のせよ)

肥瘦は各々相尋しと云なり。其の身の部靜に無くとは、はを身
體の病證の語なり。然すと皆、是とするなり。

語より、皆、是なりと點するなり。

「点頭合点する、有らう。」

張志聰曰く、「其の形こ一にすとは、靜のこ一と其の神巨なり。形と
神とを俱にする也。」

○聖にこ一且つ盛、且つ清なるは、病、目と進み。脈、軟なるは、病、精に
下るとすなり。

・ス意は以字無し。

・張介賓曰く、「脈、聖にこ一且つ盛、且つ清なるは、邪氣の熾也。
故に目に進み。脈、軟にこ一和なるは、元氣の來る也。故に病、精に
下るとす。下は退くなり。」

○諸經の實するは、病に三三に上巳也。

張介賓曰く、「此は邪氣の未だ解けざる者は、病も已むべきに上、脈は弱く無力なり。平人氣血論に曰く、病中に在れば、脈は虚す。五藏の真藏論には曰く、「病外に在り、脈實堅なる者は、皆、治し難し。邪容篇に曰く、「虚に上、細なるは、久しく以て持す」と。皆、實なるは、所謂なり。若し病、諸經に在りて、脈實と力ある者は、邪、將に外に達せんとする也。故に三日に上巳可し」

○氣口は陰を候ひ、人迎は陽を候ふ也

・周中は「候陽」と「候陰」と誤る

・楊上善曰く、「氣口は藏脈中に陰を候ふ也。人迎は府脈中に陽を候ふ也」

に在る

・張介賓曰く、「氣口は平、太陰肺脈なり。氣口獨り五藏の在るに故に、陰を候ひ、人迎は盛に在り、陽明胃の脈也。胃は六腑の大經に在り、故に、以て陽を候ふ」

陽を候ふ」